

「地元愛」は就業意識に影響するか？

地方出身学生へのインタビュー調査から

松本康資（法学部法律学科 4 年）

指導教員：長田進

本研究の目的は「地元愛を持ちつつ、都会に出てしまった」若者の実態を探り、その背景にある社会的要因を考察することである。そのために、『「地元愛」は就業意識に影響するか？』という問いかけから導き出した「地元愛が就業意識に影響すれば、地元就職を希望する」、「地元愛が就業意識に直結すれば、地方出身学生は地元就職を選択する」という二つの仮説の検証を行った。

若者の地元志向の強まりを受け、従来様々な手法によってその背景が考察されている。しかしそれらの研究では、地元志向とは単なる「希望」に留まるか、それとも地元という「結果」の達成とみるかが明らかではなく、「希望」したものの「結果」に結びつかない者の存在が捨象されていた。加えて、「都市部の大学に在籍する地方出身学生」を対象とし、彼らの実態に迫った質的調査は非常に限られていた。そこで本研究では、慶應義塾大学の地方出身学生を調査対象にインタビューによる質的調査を行った。

インタビューの結果、地元愛の影響を常に受けながら職業選択を行う地方出身学生像が浮かび上がった。しかし、多くの対象者が地元愛を持っていたにもかかわらずその影響は非常に限定的であり、ほとんどの者が地元就職を選択しないという結果が得られた。その理由としては、地元企業の選択肢の少なさもさることながら、彼らの持つ勤務地に対して地域限定的でない広域型の勤務地志向が挙げられた。この広域型は、就業意識を持たずに大学に入学した結果、所在地である東京の影響を強く受けながら就業意識が形成されたために獲得されたものと考えられた。従って、地元愛が就業意識に適切な形で反映されるためには、就業意識形成に果たす大学の役割の重要性が改めて強調されるべきであると考えられる。

なお本研究の最も特徴的な点は、対象者の多くが大学進学時に就業意識を持たないことであった。従って、就業意識と大学進学が直結するような教職志望者や理系修士などを同一条件の下対象者として含められれば、異なる結果が得られた可能性があり、その点が本研究の限界でもあった。

※本研究は、共同研究「ライフコースと地域性」の一部である。